

ピースツーリズムとは

■ 市民・行政・関係機関が一体となって、平和関連施設等を円滑に周遊するための環境整備を行うとともに、国内外からの来訪者にヒロシマの被爆の実相等を伝えていくことで、来訪者と市民が平和への思いを共有していくもの。

目指す姿

■ 国内外からの来訪者が、広島、
 ・ 被爆前の歴史・文化や市民生活
 ・ 原爆による破壊とその後の苦難
 ・ 復興に向けた市民のたゆまぬ努力によって築かれた今の姿
 ・ 被爆体験の継承と核兵器のない世界の実現への取組
 に触れて、思いを巡らすための丁寧な案内を提供することで、来訪者と市民が共に平和とは何かを考え、共感し、平和への思いを共有する。

取組概要

来訪者への情報発信について

■ 外国人旅行者や修学旅行生などの来訪者を対象に、被爆の実相を伝え、共に考え、平和への思いを共有してもらう。また、被爆の痕跡や人との触れ合いを通じて被爆の実相を伝えることの重要性を基本認識として、バーチャルな方法も含めた様々な発信内容・方法とする。

伝える内容

■ 訪れた場所における被爆の実相のみならず、被爆前の歴史、被爆後から復興に向けて市民が取り組んできた様子も伝えていく。

発信方法

■ 来訪者のことを知り、来訪者の視点に立って情報をきめ細やかに伝えていく。
 ■ 来訪者の多様な興味・関心に応じた情報提供ができるようにしていく。
 ■ 来訪者が分かりやすいよう、情報への到達のしやすさ、イメージのしやすさを追求していく。
 ⇒ これらの実現のために、被爆の痕跡や人との触れ合いを通じて被爆の実相を伝えることの重要性を基本認識として、バーチャルな方法も含めた様々な発信内容・方法を検討するが、まずは、スマートフォン等を活用した方法から着手していく。

スマートフォン等を活用した方法

■ 訪れた場所の被爆の実相といった基本となる情報に加え、関連する情報も発信する。
 ■ 来訪者の興味、関心及びニーズに応じて、自由にルートや目的地を選択可能とする。
 ■ ひと目でルート、目的地及び自分の位置などが把握でき、必要とする情報までの操作が容易にイメージできる画面の内容とする。
 ■ 来訪者が必要とする情報へ簡単に到達可能とする。

来訪者を迎えるにあたっての環境づくりについて

■ 被爆前からの歴史・文化や復興してきた足跡なども理解できる場所を選定し、広島を様々な観点から理解できるようにする。
 その際、訪れやすい関連の場所、平和について考えることができる場、休憩の場などもあわせて選定し、来訪者が広島について、より理解しやすいようにする。
 ■ 来訪者を迎えるにあたっては、多言語の説明板を設置する等、受入環境の整備を進める施策に取り組む。
 ■ 場所を巡るにあたっては、伝えたいテーマ、地理的な範囲、移動手段等を考慮して複数のモデルルートを設定する。

平和に関連する場所

■ (別紙1) 53箇所

市民等が関わる環境整備

■ 施設等を所管する管理者や市民等と共に、平和に関する場所の環境整備に向けて取り組んでいく。

ルート設定の基本的な考え方

■ 来訪者が関心のあること(被爆の実相や被爆前からの歴史・文化、復興してきた足跡など)や、滞在日数等の旅行条件に合わせて選択できるように、複数のテーマとストーリーを設定していく。
 ■ その際には、来訪者が静かに考えたり、ニーズに応じて選択したりすることができるよう考慮する。
 ■ 来訪者が、ルートの途中でやめたり、ルートの一部を変更できるなど、自由に巡るようにする。
 ■ 来訪者が巡りたいポイントをおさえて快適に周遊できるよう環境等の整備を行っていく。

提案ルート

■ (別紙2~5)
 ① 徒歩と自転車(ピーすくる)による被爆当時の痕跡を残す被爆建造物を巡るルート
 ② めいぷる〜ぷと徒歩による被爆前後の文化・文学を巡るルート
 ③ 徒歩と自転車(ピーすくる)による市民生活の復興を巡るルート
 ④ 徒歩による被爆に関する資料館を巡るルート

迎える市民の積極的な関与について

■ スマートフォン等の情報端末により案内や施設解説をするのみならず、市民と触れ合いながら巡る施策に取り組む。

迎える際の対応

■ 市民一人一人が、来訪者に説明、案内等ができる環境づくりを行う。
 ■ 来訪者が、市民との触れ合いを通じて、広島が平和を希求する街であると実感できるような施策を展開していく。

関与のあり方

■ 市民が来訪者と関与・交流できる場の設置や、市職員の積極的な関与などの対応を進めることにより、市全体の力を結集させていく。

1 平和と文化の一体的な推進によるヒロシマの発信

—中核となる関連施設における発信力の強化—

- (1) 平和事業においては、文化事業も取り込んで幅広く推進する。
(例示) 来訪者に平和について理解を深める機会を提供するため、文化・芸術などの幅広い分野によって発信力を強める。
- (2) 現代美術やアニメーションフェスティバルに設けるヒロシマ賞への市民の関心を高めるとともに、国内外からより多くの来訪者を迎える事業を推進する。
また、現代美術館においては、市の施設としての市民の関心をさらに深める事業を推進する。
- (3) 平和記念資料館や現代美術館を始めとした市の施設は、平和と文化事業の発信機能を強化し、あわせて関連事業の共同実施を行う。
- (4) 事業の推進にあたっては、一過性のイベントに終わらせることなく、次世代につなげる事業を推進する。

2 平和記念資料館と関連する施設、被爆遺構などの発信力の強化

—関連施設や館外遺構などと一体的な活用—

- (1) 平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に加え、被爆の実相についてより知識を深めるため、関連施設を一体化した事業推進を図る。
(例示) ①本川小学校、②袋町小学校、③被爆資料の一部を展示している旧日本銀行広島支店、④資料館の附属施設であるシュモーハウスなどを含めて資料館群として運営する。
- (2) 平和記念公園から出土する被爆前の街並みなどの地下遺構を保存管理、公開する事業を推進し、館内展示と一体化させる。
- (3) 市内にある被爆建造物の保存を積極的に推進する。
(例示) 市所有の広島大学旧理学部 1 号館の保存活用について具体化を図るとともに、旧広島陸軍被服支廠などの保存について関係機関の協力を得る。
- (4) 本館休館中の被爆展示のあり方について、来館者の意見などを含め、理解しやすい展示に努めることで、発信力を強める。
- (5) 被爆者の悲惨な体験を風化させることなく、次世代に伝える事業を推進する。
- (6) 市が推進してきた主要な平和事業（米国国立航空宇宙博物館(スミソニアン博物館)への被爆資料の貸し出し、原爆ドームの世界遺産化、国際司法裁判所（ICJ）における核兵器の使用などの違法性の審理）などの過程についても展示し、周知を図る。

3 市民・民間等との協働体制の構築

—市民・民間等が主体的に参画できるような体制づくり—

- (1) 市民がどのようにすれば参画できるのか、分かりやすく提示する。
(例示) ボランティア活動を広く捉え、市民から提案を募るなど様々な形で参画できる体制を作る。
- (2) 平和行政に関心を持っている市の職員の力を結集し、行政側からこの事業をサポートする体制を作る。
- (3) 市民が自主的に行う平和活動を、平和文化センターなどがより一層バックアップする体制を作る。

4 拠点施設の確保など

—市民と来訪者などの接点となる場所の設定—

- (1) 来訪者が各施設などを訪問する前にブリーフィングできる場所や機会を設ける。
(例示) 交通の便利なところに拠点施設を確保する。
- (2) 拠点施設などにおける来訪者の滞在時間の延長を図るため、ヒロシマの芸術・文化に触れる事業などを推進する。
(例示) 神楽の公演など

5 今後の事業推進のための関係機関との調整・チェック機能の構築

—ピースツーリズム推進懇談会の継続的活動など—

- (1) とりまとめた各事業の具体化にあたって、その進捗状況を把握し、今後も進化させていくため、関係機関と調整を図る機能を持つ組織を設け、その組織を核として、市民や事業者などと協働して、各自の役割を分担できる仕組みを構築していく。